パートナー情報誌
香澄
かすみ
Kasumi

センター長あいさつ　1P
「センター内環境学習」について　1～2P
ヤナギトラノオを見て　2～3P
2021 年度後期図書紹介活動の報告　3～4P
「私の細道」（その 41）最上川　5～6P
編集後記　6P

パートナー情報誌　ＫＡＳＵＭＩ　第３１号（通巻６９号）　発行日　令和４年７月３１日

センター長あいさつ

本年４月より、センター長を拝命いたしました江幡でございます。

パートナーの皆さまには、常日頃より当センターの運営にご支援ご協力をいただき、心より御礼申し上げます。

４月にセンターに参りましてから、子供たちへの環境学習や図書読み聞かせ、自然観察会など、皆さまのご活動を拝見させていただいておりましたが、本当に素晴らしい活動状況に、心から感銘いたしておりました。

センター事業の重要な役割を担っていただいており、まさに皆さまあってのセンターであることを、改めて強く強く感じたところでございます。

私は、このような環境分野については、まったくの素人ですので（専門は別分野なので）、皆さまの活動状況を見ながら、たくさん勉強させていただいているところでございます。

県としても、当センターの存在意義が問われ始めている中、センターが充実した成果を出していくためにも、パートナーの皆さまの弛まぬご支援ご協力が不可欠であると考えております。

ぜひこれからも一緒に、センターをより一層盛り上げてまいりましょう。

結びに、パートナーの皆さま一人ひとりへの心からの感謝とともに、パートナー情報誌「香澄」の益々の充実と皆さまの益々のご健勝ご活躍をご祈念し、挨拶とさせていただきます。

茨城県霞ケ浦環境科学センター　センター長　江幡　一弘

「センター内環境学習」について　～ 今年度の取組み ～

パートナーの皆様には、環境学習をはじめ、霞ケ浦環境科学センターにおける様々な活動で大変お世話になっております。今年度もパートナーの皆様のご協力のもと、数多くの「センター内環境学習」を実施してまいりました。今回は４月２８日に実施いたしましたパートナー研修の内容及び、当日の様子をご報告いたします。

【パートナー研修の内容】※プレゼン資料より一部抜粋

「センター内環境学習」の紹介

①野外観察（※配付資料「指示書解説編１・２」参照）

・野外での観察を中心とする学習。　・センターのフィールドで簡単な野外観察を行う。

〈学習活動の内容〉

・魚の観察　・植物プランクトンの観察　・動物プランクトンの観察

・霞ヶ浦の展望　・野鳥の観察　・水辺の植物の観察

生き物どうしのつながりや、私たちの暮らしとのつながりについて知る。

②水質調査

・水質調査を中心とする学習　・湖水、河川水、生活排水の水質調査を行う。

〈学習活動の内容〉

基本的な水質調査の方法について学ぶ。

・水の色、におい　・透視度　・ＣＯＤ

自然の水と生活排水の違いを知る。

③プランクトン観察

・顕微鏡を使ったプランクトン観察を中心とする学習

・動物プランクトンと植物プランクトンの観察を行う。

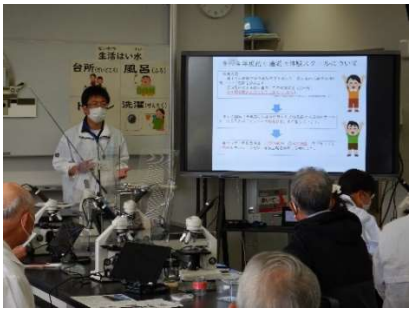
〈学習活動の内容〉

・動物プランクトンの観察　・植物プランクトンの観察　※タブレットＰＣでプランクトンの写真撮影を行います。

植物プランクトン・動物プランクトンと生きもののつながりを知る。

プランクトンの観察を通して、水質について考える。

【パートナー研修の様子（写真）】



「センター内環境学習」へのご協力、心よりお待ちしております。

（センター　鈴木）

ヤナギトラノオを見て

この４月より霞ケ浦環境科学センターに赴任しました小幡と申します。昨年までミュージアムパーク茨城県自然博物館で植物担当の学芸員として勤務していました。霞ヶ浦へは調査や観察会などで何度か来ていましたが、今年から何時でも霞ヶ浦と向き合えるということでうれしく思っています。

４月 13 日、センターに勤めてさっそくパートナーの重要な活動の一つである霞ヶ浦田村・沖宿・戸崎地区自然再生事業地の植物定点調査に参加しました。花の季節にはちょっと早かったの

ですが、H 区でヤナギトラノオを見ることができました。ヤナギトラノオは数年前に阿見町の掛馬の湖岸で見て以来です。改めて調べてみると、現在茨城県での自生地は、霞ヶ浦湖岸 4 か所のみということで、茨城県ではこの植物を絶滅危惧Ⅱ類に指定しています。

（ヤナギトラノオ）

ヤナギトラノオはサクラソウ科オカトラノオ属の多年草で、尾瀬など山地の湿地に生育します。日本では本州中部以北から北海道に分布し、さらに北半球の寒帯に広く分布するといわれます。たぶん茨城県の自生地は太平洋側の南限にあたるのではないかと考えています。葉腋から数本出る黄色の美しい花序がよく目立ちます。茎のてっぺんに花序を 1 本つけるオカトラノオやヌマトラノオとはだいぶ様子が違います。尾瀬でヤナギトラノオを見るのは 7 月上旬ころですが、霞ヶ浦ではゴールデンウィークごろです。

ところで、なぜ寒地の植物が霞ヶ浦に生えているのでしょうか。気候が今より寒かった氷期の生き残りと考えますが、温暖になった縄文時代には霞ヶ浦は海の入江でした。このようなことを考えると話は単純ではありません。しかし、霞ヶ浦には、ヤナギトラノオばかりでなく、他にも寒いところに生える多くの植物を見ることができます。オオマルバノホロシ、クサレダマ、ミズオトギリ、ミズチドリ、トキソウ、アサマスゲなどがそれにあたります。この不思議な事実について考えてみたいと思っているところです。

（センター　小幡）

２０２１年度後期図書紹介活動の報告

2021 年 10 月～2022 年 3 月間のセンター文献資料室新規購入図書を中心とした、パートナーによる図書紹介本は、下表の 32 冊でした。

図書紹介の内容につきましては、２階交流サロンに有る「図書紹介一覧」ファイルをご覧下さい。

書　　名	著　者　名	出　版　社
アーカイブス　利根川	アーカイブス利根川編集委員会	信山社サイテック
すいめん	高久　至	アリス館
豊かな海のためにできること	中嶋　亮太	教育画劇

書　　名	著　者　名	出　版　社
止めなくちゃ！気候変動	ニール・トレイン	ひさかたチャイルド
～地球の未来を考える～気温が１度上がると、どうなるの？―気候変動のしくみー	文：K・S シュライバー 絵：S・マリアン	西村書店
山と森の動物たち	今泉　忠明	朝日出版社
見る知る調べる水～身近な水環境の全国一斉調査 10 年のあゆみ～	身近な水環境の全国一斉調査 10 年誌編集委員会	星雲社
小さな小さなウイルスの大きなはなし	文：井沢　尚子　絵：坂井　治	くもん出版
鳥になった恐竜の図鑑	川上　和人	学研プラス
すごい虫ずかん～ひるの虫とよるの虫～	じゅえき　太郎	KADOKAWA
おやおや、おやさい	文：石津　ちひろ　絵：山村　浩二	福音館書店
やきざかなののろい	塚本　やすし	ポプラ社
イチョウ・奇跡の２億年史	ピータークレイン	河出書房新社
虫っておもしろい！みてみて！日本のへんてこな虫	文：養老　孟司 写真：海野　和男	新日本出版社
もりの 100 かいだてのいえ	いわい　としお	偕成社
ミジンコでございます。	文：佐藤　まどか　絵：山村　浩二	フレーベル館
ポリぶくろ、１まい、すてた	文：ミランダ・ポール 絵：エリザベス・ズーノン	さ・え・ら書房
はっぱじゃないよ　ぼくがいる	姉崎　一馬	アリス館
地球温暖化を解決したい　～エネルギーをどう選ぶ？～	小西　雅子	朝日出版社
やまをつくったもの　やまをこわしたもの	絵と文：かこ　さとし	農文協
茨城のトリセツ　～地図で読み解く初耳秘話～	旺文社旅行書編集部「トリセツ」編集チーム	旺文社
ボクも川になって	文：さとみ　きくお　絵：うしじま　しずこ	ダイヤモンド社
変身する生きものずかん	柴田　佳秀	すずき出版
藻類	ルース・カッシンガー	築地書館
ビジュアルデータブック　日本の生き物（固有種・外来種が教えてくれること）	今泉　忠明	学研プラス
にっぽんのカワセミ	監修：矢野　亮　編集：ポンプラボ	カンゼン
環境破壊モンスターから地球を救おう！	マリー・G・ローデ　訳：小林玲子	河出書房新社
日本の大地のかたち	監修：鎌田　弘毅	岩崎書店
みずたまレンズ	今森　光彦	福音館書店
小川芋銭　－聞き歩き逸話集―	小川芋銭逸話集刊行委員会	牛久市立図書館
川と湖を見る・知る・探る　水陸学入門	日本水陸学会	地人書館
よくわかる最新水処理技術の基本と仕組み	和田　洋六	秀和システム

（パートナー　浅野）

「私の細道」　（その４１）　最上川

２０１１年から続けてきた「私の細道」は、２０１９年に膝の半月板を損傷し、更に、２０２０年以降のコロナ禍によって、２０１８年７月の山形行以降、約１年半の活動停止を余儀なくされていた。コロナ禍は初期の危機的様相を持ち堪え、沈静傾向を経緯した後また上昇するなど、幾度も波を繰り返してきた。２０２０年１０月末頃は丁度沈静期に当たり、コロナによる経済活動の低迷への対応として、GOTO トラベルなどの旅行支援策が始まった頃であった。コロナはその後も株変異を繰り返し脅威は続くことになるが、「私の細道」の今後に不安感を抱くこの状況に義姉夫妻が援助ともいえる提案をしてくれた。この沈静期を利用して、「最上川」以降を義兄の車での我々夫婦と義兄夫婦４人の旅行と相成ったのである。

２０２０年１０月３１日、十三夜の翌々日（満月の日）に、４泊５日の山形行を始めた。東北自動車道を北上し、途中、斎藤茂吉記念館に立ち寄った後、まず、前回見残した大石田の西光寺と向川寺へ。

曾良の旅日記によると、元禄２年（１６８９）５月２９日、大石田滞在中の芭蕉は地元の俳人川水と一英の案内で黒龍山向川寺に参詣とある。曾良は体調悪く加わらなかったらしい。西光寺については曾良の記載はないが、久富哲雄の「奥の細道を歩く辞典」に芭蕉の句碑がガラス張りの覆堂の中に安置されていると記されている。

黒龍山向川寺はうっそうとした木々に囲まれた石段を昇った奥にある。寺務所に座しておられた女性に芭蕉の所縁を問うてはみたが、ご存じなかった。

次に西光寺を訪ねた。本殿全体がシートで覆われており数人が作業しており工事中であった。寺の裏に回ると芭蕉の「さみだれを集めてすずし最上川」の真新しい句碑が置かれており、久富氏の記述とは異なるものであり、更新されたようである。傍に虚子の「夏山に襟を正して最上川」の句碑も置かれていた。見ていると数人の年配の男性と女性が近づいてきて、句碑から始まる芭蕉談義が始まった。秋田の湯沢からのグループで、芭蕉といえば象潟に行ったかと問われ、未だだといえば、是非行ってくれ、象潟の蚶満寺（かんまんじ）に行くべしと熱く推められた。

その夜は新庄に宿を取り、翌 11 月 1 日朝、目覚めて窓のカーテンを開けると川沿い一面朝霧に包まれていた。

（芭蕉・曾良像（本合海））

早々に最上川沿いの道を下っていくと、本合海（もとあいかい）の旧渡舟場跡があり、芭蕉と曾良の像と句碑が配置されている。二人はここから最上川下りをし、清川で下船している。丁度、川が大きく曲がったところにあり、周辺の山々が紅葉して趣のある景となっている。かつて、ここで金子兜太が俳句講座を開いたとのことで、周辺は兜太通りとなっている。骨太俳人兜太は私がここに来た２年前（2018）に亡くなっている。近くの積雲寺には子規の歌碑もある。

芭蕉像の場所から少し離れた川辺の対岸に岩肌の目立つ全山紅葉となっている小山があり、ちょっと立ち寄ってみた。中腹に赤い祠も見える。釣人もおり、山の名を尋ねたところ、名は知らないが、義経がここで下船したらしいとの話。河原に説明岩があり、それによると、義経は頼朝に追われ平泉を目指してみちのくの逃亡を図るが、その途中、最上川を下り、この地で下船して

堺田を経由して北上したとの事。してみると、義経の北上の道を芭蕉らは平泉からほぼ逆行したことになる。これが義経好みの芭蕉の意図によるものか否か興味深い話ではある。山の名は八向山。河原には金子兜太皆子夫妻の句碑もあった。

（最上川舟下り）

さて、最上川ライン下り。我々は芭蕉らの乗船場よりやや下流の古口。コロナの鎮静により、観光客も多い。10 時頃、乗船所古口に着くと既に大勢集まっており、第 1 便の乗船は始まっていた。我々は第 2 便。1 舟 30 人くらいか。丁度そこへ、カメラ一式を抱えたメンバーが乗り込んできた。NHK 山形放送局の取材だという。船長は三瓶勇さん。元気いっぱい名調子。両側を紅葉に包まれた山並の中、ゆったりと、時には瀬に揺れながら約 1 時間の船旅であった。全員マスクして、カメラを手に三瓶さんの説明に添ってシャッターを押していく。「おくのほそ道」に記載されている板敷山・白糸の滝・仙人堂についてもタイムリーに紹介された。この最上川ライン下り、作家田辺聖子が同じ舟下りをしており、その状況が「おくのほそ道を旅しよう」に記されている。我々が楽しんだ前年（2019）に亡くなっており、お聖ちゃんに思いを馳せながらの舟下りでもあった。草薙で下船し、バスで古口に戻り、昼食を取った。古口は元戸沢藩の船番所で、元和８年（1622）常陸松岡藩（茨城県高萩市）から移封されたようである。

（白糸の滝付近）

その夜の宿は鶴岡であったが、テレビのニュースで、さっきの最上川下りの様子が取り上げられており、同乗した NHK 取材班によって、コロナ明けの観光客として我々も映し出されていた。

五月雨を集めて早し最上川　　芭蕉

（パートナー　　小松）

＊＊＜編集後記＞＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

猛暑が梅雨空を吹き飛ばしたというのでしょうか。この夏は、観測史上最速の出梅と酷暑の到来を経験することとなりました。徐々に暑くなり寒くなるから耐えられるし、多少の厳しさにも情緒を感じることができるものです。季節の移ろいを楽しむことはもう望むべくもないのか、今年がことさら特異な年であることを願いたいです。

「香澄」夏号は、素材が少なくて苦慮するのが常でしたが、江幡一弘センター長に寄稿を賜り、お陰様で６頁構成の確保に至りました。また、間断なく記事の提供を頂いている、小松パートナーの活動が、お怪我で中断していたこと、波状的に寄せる感染症の不安の中、細道紀行が再開されていたことなど思いも到りませんでした。執筆を賜り有難うございました。

申し上げるまでもございませんが、原稿あっての編集です。コメントをお付け頂ければ、写真だけでも結構です。原稿の型式、ページ数に制約も設けておりません。ご意見、ご感想などでも、編集の糧となりますのでお気軽にご投稿いただければ幸いです。できる限り執筆者のご意向に忠実に、大切に取扱わせて頂きますので宜しくお願い致します。　　（パートナー　栗原）

「香澄」編集委員会：浅野明宏、有吉潔、栗原繁、矢島信克、樽見博文